様式　1

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	永井　諒
論文担当者	主　査　　黒田　悦史
	副　査　　平田　淳一
	副　査　　石戸　聡
学位論文名	Serum Procalcitonin and Presepsin Levels in Patients with Generalized Pustular Psoriasis (膿疱性乾癬患者における血清プロカルシトニンとプレセプシンレベル)

論文審査の結果の要旨

膿疱性乾癬は重症乾癬の一型で、全身性の潮紅皮膚上に無菌性膿疱を多発し、高熱、白血球増多、CRP の上昇など、敗血症様の全身症状を伴う稀少な皮膚難病である。病理組織学的に好中球の表皮内浸潤による Kogoj （コゴイ）海綿状膿疱と角層下膿疱を特徴とし、再燃時には重症感染症との鑑別が困難である。そのため、臨床的に有用な膿疱性乾癬のバイオマーカーが求められている。本研究では重症感染症の指標として用いられている血清プロカルシトニンとプレセプシン値に着目し、尋常性乾癬、乾癬性関節炎および膿疱性乾癬患者の血清サンプルを用いて検討が行われた。また、プレセプシン産生細胞について大腸菌由来生体粒子刺激による *in vitro* の実験系で検討が行なわれた。その結果、① 膿疱性乾癬群の血清プロカルシトニン平均値は、尋常性乾癬群、乾癬性関節炎群並びに健常人の基準値に比較して高値を示すが、感染症のカットオフ値よりも低値であること、② 膿疱性乾癬群のプレセプシン値は健常人の基準値および他群に比べ高値であるが、感染のカットオフ値に近いことが示された。以上より、膿疱性乾癬患者に発熱を認めた場合、プロカルシトニンの測定は感染症と膿疱性乾癬の増悪の鑑別に役立つ可能性が示唆された。さらに、③ プロカルシトニン値、プレセプシン値ともに膿疱性乾癬の治療により有意に減少することが明らかにされた。また、④ 大腸菌由来生体粒子刺激により単球のみならず好中球からもプレセプシンが産生されることが示された。

本論文は、プロカルシトニンとプレセプシンが膿疱性乾癬のバイオマーカーとして有用であることを貴重な臨床サンプルを用いて明らかにし、さらに、プレセプシンが好中球にも由来することを明らかにした臨床的に意義のある研究であり、学位論文に値すると判断した。